

松本城(烏城)(国宝, 国史跡, 百名城)(松本市丸の内)

松本城（まつもとじょう）は、長野県松本市にある城である。安土桃山時代末期-江戸時代初期に建造された天守は国宝に指定され、城跡は国の史跡に指定されている。松本城と呼ばれる以前は深志城（ふかしじょう）といった。市民からは別名烏城（からすじょう）とも呼ばれている。しかし文献上には烏城という表記は一切ない。

戦国時代の永正年間（1504-1520 年）に、松本平の信濃府中（井川）に井川館を構えていた信濃守護家小笠原氏（府中小笠原氏）が林城を築城し、その支城の一つとして深志城が築城されたのが始まりといわれている。後に甲斐の武田氏の侵攻を受け小笠原氏は没落、武田氏は林城を破棄して深志城を拠点として松本平を支配下におく。武田氏滅亡後の天正 10 年（1582 年）、徳川家康の配下となった小笠原貞慶が旧領を回復し、松本城に改名した。

天正 18 年（1590 年）の豊臣秀吉による小田原征伐の結果、徳川家の関東移封が行われ当時の松本城主小笠原秀政も下総古河へと移った。代わりに石川数正が入城し、石川数正とその子康長が、天守を始め、城郭・城下町の整備を行う。

その後、大久保長安事件により石川康長が改易となり、小笠原秀政が再び咲く。大坂の陣以後は、松平康長や水野家などの松本藩の居城として機能。水野家の後は松平康長にはじまる戸田松平家（戸田氏の嫡流）が代々居城とした。

享保 12 年（1727 年）には本丸御殿が焼失、以後の藩政は二の丸で執務がとられた。

構造

典型的な平城。本丸・二の丸・三の丸ともほぼ方形に整地されている。南西部に天守を置いた本丸を、北部を欠いた凹型の二の丸が囲み、さらにそれを四方から三の丸が囲むという、梯郭式に輪郭式を加えた縄張りである。これらは全て水堀により隔てられている。現存 12 天守の中では唯一の平城。

天守

5 重 6 階の天守を中心にし、大天守北面に乾小天守を渡櫓で連結し、東面に辰巳附櫓・月見櫓を複合した複合連結式天守である。大天守は、初重に袴形の石落としを付け、窓は突上窓、破風は、2 重目南北面と 3 重目東西面に千鳥破風、3 重目南北面に向唐破風の出窓を付けている。

大天守は構造的には望楼型天守から層塔型天守への過渡期的な性格が見られ、2 重目の屋根は天守台の歪みを入母屋（大屋根）で調整する望楼型の内部構造を持ちながら外見は入母屋を設けず強引に寄棟を形成している。ただ、強引とはいえ外見的には層塔型の形状を成立させているため、各重の屋根の隅は様々な方向を向いており、松本城天守の特徴のひとつとなっている。3 階の、低い天井に窓のない特殊な空間が生まれたのはこのためで、パンフレットなどでは「秘密の階」と説明されているが、構造上は 2 重の上に生じた大屋根構造の名残りともいえる屋根裏的な空間を階として用いたことによるものである。内部は最上階（6 階）の他に 4 階を白壁造りにするなど、ある程度の居住性が考慮されている。外壁は初重から最上重まで黒塗の下見板が張られており、この黒の原料は 1950 年（昭和 25 年）の修理工事着工までは墨によるものであったが、解体修理の際に漆塗りの痕跡が見つかったことから、修理工事が竣工した 1955 年（昭和 30 年）以降は黒漆塗りとなっている。乾小天守も構造的特徴は大天守と同様であるが、最上階に華頭窓が開けられている。

Wikipedia による

